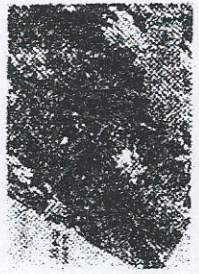


『ニッポン丸はどこへ行く』

青木 慧



「日本の経営」の裏舞台を描く

〈評者〉 下山 房雄

著作『日本の経営の擁護』などで活躍してきた精神的イデオロギー・津田真澄が、注目すべきことを近ごろ述べている。「経営の裏舞台をのぞいて、そのすさまじさに怖れをなして引き返してきて、表舞台の階段にちよつと乗っているのが今の私の日本の経営論なのですが、そういう裏舞台がなんであるかというところまでふみこまない」と……（『書齋の窓』一九八三年三月）。津田のいう裏舞台は、昭和電工や田中角栄の事件にあられたような、日本経済の戦略部門における官民協調をめぐる寄生性・腐朽性のことらしい。だが美化されてきた「日本的労使関係」そのものには「深い暗黒の領域」（日本労務学会での津田の表現）はなほのぞろりか。

青木慧の七冊めのルポとして昨年末に出たから話題を呼び、社会運動の複数の潮流のもとで評価されるに至った本書は民間大経営の労資関係に存する「暗黒の領域」を日産自動車・雪印食品・昭和電工・日本ステレオスなどのおぞましい「集団主義」の実践の姿を通してズバリ描き、しかもこの「暗黒の領域」の育成・発展が個別企業をこえた一種の社会的な運動として、つまり「ニッポン丸」の舵取り的ポジションから行われてきたことを、豊富な事実と貴重な聞き取りによって描いている。

今崎 暁巳や鎌田慧など青木と並んで日

本の労資関係の暗部を対象としてきたルポライターのなかでの青木の特徴は、彼の前著『青い鳥はどこへ』（労働旬報社）への私の以下のコメントで示されよう。

「ナチズムや日本軍国主義のもとで、多くの善良な父や夫たちが狂気の暴力行為に駆られていったのは半世紀も前のことではない。今日世界中の資本家のみならず中ソの為政者からも羨望の熱い目をそがれている日本の企業の高生産力とそれを支える日本の労資関係がその種のファッショ的暴力行為によって維持されているありさまを鮮烈に描いたルポである。取材の対象を加害者の側にも求め

その論理と生態を抵抗者のそれと交錯させ展開している点が出色である。——  
同様の特徴は本書にも貫かれている。第一章では森山欽司・自民党労働問題調査会長が登場する。日本政治経済研究所長佐野博——青木はこの研究所の「特殊研修会・日共民青や左翼分子に対処する管理監督者研修と健全な組合職場リダー育成講座」に参加する——、日本生産性本部深沢事務局長、工藤全国民主化運動連絡会議初代会長、瀬戸IMF日本事務所長などA級の人物から、BC級の人々つまり労働現場での不当労働行為の

実行当事者まで広く深く取材している。青木の自称「事実崇拜主義」の成果として、本書の読者は意外な事実や、あり

「多岐にわたる」で具体的なつかめなかつた事実を多く知ることができよう。青木のルポに對しては「会社はこわいところだと思わせ、労働者を萎縮させる」というような評が社会運動の指導者の一部にあるのだが、私としてはこの書に示されたような冷徹な事実を十分ふまえ、それに対抗しうるあらたな労働運動の構築の延長上で、「民主的規制」なり「下からの経営参加」が対置されるべきだと考える。

本書のおわりの章での青木の自問「この日本丸にあって、どう生きればいいのか」「無闇に忠誠を求める企業や組織ほど、排撃は強烈である。……十人十色の人間が、一色に塗りつぶされそうになつたとき、私は自分の色を失わないで生きていけるだろうか。／＼この問いかけが私の原点である」への答えはやや情緒的であつけない。いわく「国家や企業や組合といった組織と機構のなかで、一人ひとりが自らの《主体》を取り戻す」「労働者が自らの《主体》を守るために労働組合というものがあるのであって、そこに労働組合の組織としての《主体》がある」。それはそうなのだが、回復されるべき主体が困結・連帯する主体であることを確保する筋道はつけておかねばならないのではないか。（二七三頁、一五〇〇円 朝日新聞社）

あおき さとし 一九三六年生まれ。フリージャーナリスト。